//REPORT//

令和 3 年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

7/27 開催　第 1 回「ほかの学校はどうしてる？GIGA スクール構想下での ESD」

ユネスコスクール事務局では、令和 2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を 1～2 か月に 1 回のペースで実施しています。今年度第 1 回目は「ほかの学校はどうしてる？GIGA スクール構想下での ESD」と題して、10 名の参加者と対話の場をもちました。

■プログラム

開催日時：2021 年 7 月 27 日（火） 16：00～17：00

時間	内容
16：00	**オープニング** 趣旨説明
16：05	**事例紹介** 全国小中学校環境教育研究会　棚橋　乾　氏
16：20	**コメント** 玉川大学教育学部　小林　亮　氏
16：25	**グループディスカッション** 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16：45	**振り返り** グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。 （良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等）
17：00	**クロージング**

■　「GIGA スクールと ESD」

全国小中学校環境教育研究会　棚橋乾先生より話題提供いただきました。
以下、ご発表の概要です。

ESD 活動における有効な PC やタブレットの活用法には大きく 3 つあります。1 つは話し合い活動を工夫するために用いることです。これまで付箋やカードを使用した KJ 法で意見を出し合っていた話し合い活動において、子どもたちがパソコンやタブレットを使用して意見を出し合い、それらを一度に表

示し共有する、という使い方ができます。2 つ目は発表方法の工夫です。今までは大きな模造紙を使ったポスターセッションで発表していましたが、自分が調べたことが収納されているタブレットで表示し、ほかの子に説明をすることができます。 さらに 3 つ目として一番お話ししたいのが、評価方法の工夫、つまりポートフォリオ評価に活用することです。これまで紙ベースでルーブリックやイメージマップ、自分で考えたこと、取り組んできたこと、撮った写真やもらってきたパンフレットをファイルに収納して作成していたポートフォリオを、タブレットや PC のファイルに収納し、e-ポートフォリオ（あるいはデジタルポートフォリオ）を作成することができます。このポートフォリオの中身をどんどん蓄積することでラーニングポートフォリオが出来上がり、そのポートフォリオを振り返っていくことで自分自身の考えの変化や、できるようになったことを実感することができます。これらの実感を得ることにより、学習意欲が向上し、次の活動がさらに充実する、という好循環を生み出します。つまり、活動と自己評価が循環する、ということです。

e-ポートフォリオの効果として、最大のポイントは紙ベースではできない動画や音声などすべての情報を収納できること、加えて他の意見が参照しやすく思考が深まる、探究的な学習に合う、自己評価が深まり、教師も評価しやすい発表したいコンテンツをピックアップして簡単にプレゼンできる、オンライン交流の際に活動記録を表示したり、交流内容を記録したりしやすい、など多くの利点があります。

PC やタブレットの使用は、座学だけではなく、探究的な学習が重要な ESD 活動に非常にフィットしており、思考・判断・表現力の育成、自己評価による主体性の向上につながるこうした活用法は、これから重要になってくるでしょう。

■ ICT 教育の可能性

ASPUnivNet 加盟大学でユネスコスクールを支援する立場でありながら、大学の教育学部自体もユネスコスクールに加盟をしている玉川大学の小林亮教授より、話題提供を受けて下記のコメントをいただきました。

- 棚橋先生のお話は 2 つの観点、すなわちユネスコスクールに限定せず日本の学校教育の最前線となっている問題領域である ICT 教育（GIGA スクールは ICT 教育の 1 つ取り組み）と、教育評価論の観点から大変興味深い内容でした。
- 特に、教育評価の観点から、e-ポートフォリオを通して児童の自己評価が高まり、主体性の向上につながる、ということでしたが、学習者の動機づけや自尊感情、自己効力感に関する形成的な評価の観点から非常に効果があると感じました。
- ユネスコや OECD では学習者の社会情動的スキルの向上を非常に重視しているため、このスキルの向上に e-ポートフォリオをどう活用していくかというのは、これからユネスコスクール関係者全員にとって重要な課題にあるのではないかと思います。
- 棚橋先生と皆様へのご質問：
  ① e-ポートフォリオ（デジタルポートフォリオ）という、非常に効果的な学びの振り返りの手法を、誰も取り残さないという、SDGs や学校教育の情報化の推進に関する法律の中にもある個別最適化された学びの文脈において、学習に乗り切れない多様な学習者（例：

発達障害や人間関係をうまく築けない子、学校に居場所が見つからない子、異文化とつながっていて日本の学校文化になじめない子）に対し、どのように工夫して適用するか？

② 教育評価方法を使って地域社会をうまく巻き込んでいくには、どういう工夫が考えられるか？

＜棚橋先生の回答＞

① 総合的な学習の時間においては、子どもたちがのめり込んでいくと教科の学力は関係なく、できる子ができない子に教えたり、お互い教えあったり、学びあう姿勢が見られ、大きな問題なく実施している。総合的な学習の時間に持続可能性に関するファクターを入れて ESD に取り組んでいくと、子どもたちはますますのめり込んでいく。そこが総合の醍醐味であり、非常に面白いところ。

② 地域を巻き込むことに関しては、どのように e-ポートフォリオと関係するのかは今後の課題。デジタルデバイスについての地域の方々の反応は、子どもたちのやっていることになんだかついていけない、と感じられているため、そこをどうやって子どもたちがつなげていくか。ただ、どんな仕事であってもほとんどパソコンなしでやれるような仕事はなくなってきており、そういう意味では社会全体のパソコンとかタブレットを使うハードルは下がってきていると期待している。

■ ICT 機器を活用した今後の活動展開

棚橋先生の話題提供と小林教授からのコメントを受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- タブレットを持って、実際に外に観察に出かけたり、インタビューをしたり、タブレットを有効活用していかなければいけないと感じた。
- プレゼンなどに PC を使っていなかったので、棚橋先生に教えていただいた思考ツールやプレゼンに関するツールなど便利なものが入っているロイロノートをダウンロードして、2 学期からはそれを使って授業をしてみたい。
- タブレットの活用と地域連携に関して、学校側でも高齢者の学びにもつながるような、生涯学習的なものにより役立てて何か考えていけないだろうか。ESD を推進するにあたり、学校は地域連携というとどうしても地域の人に教えてもらう、という立場になりがちだが、地域の方に還元していくことをもっと考えたい。
- ほかの子と違う意見を持った子がクラスでは浮いてしまったりポツンとしてしまいがちだが、タブレットを使って海外の子どもとも交流することを通し、世界の様々な子と関わることによって、お互いに気持ちを共有したり、安心して学ぶことにつながるのではないかと思った。
- ESD や SDGs に関して、子どもたちに教えるというよりは学んでいく仕掛けをどう作っていくかということを考えたら良いのではないか。

- 教師が教えるのではなく、一緒に学んでいく姿勢を見せ、当事者意識を持てるような学習を進めたいと思った。
- 生活課題や発達課題を持った子どもたちに関し、ICT 機器を一人 1 台持つことによって調べたり何かをしたりすることに対してこれまでよりも授業に参加するハードルが下がるのではないか。
- 子どもたちはデジタル機器とも相性が良く、教師より生徒の方が詳しい状況もある。授業の中では一斉に使うというより、自由に使わせてあげようと考えており、文房具の一つしてクロームブック(Chromebook)を使っている。
- 評価については、テキストマイニングの活用の可能性があるのではないか。
- 今までポートフォリオを使用していたが、クラウドの活用も考えたら良いのではないか。
- インターネットの活用が増えると、デジタルデバイド問題もこれから深刻になる可能性もある。
- GIGA スクール特有の問題も考えなければならない。特に、文科省からはタブレットを家庭へ持ち帰ることができるという方針が出ているが、自治体や学校によっては家庭への持ち帰りを許可していない。授業以外でのタブレットの活用、特に家庭に持ち帰ってどうするのかという問題も考えなければならない。
- タブレットの活用に関し、リスクを中心に考えるのではなく、ポジティブに活用していく方法を考えるデジタル・シティズンシップ教育が必要だと思う。

[オンライン意見交換会の様子]

※次回は、2021 年 8 月 24 日(火)16:00～17:00「明日の授業から使える！小中高対応、ESD のヒント集！」というテーマで開催します。お申込み方法などの詳細は、ユネスコスクール公式ウェブサイト内「最新情報」、ユネスコスクール公式 Facebook に掲載中です。ぜひご参加ください！